



神楽坂を
良く知る

教科書

神楽坂検定 初級

2015年 11月 発行

NPO法人 粋なまちづくり倶楽部 監修

目次

【1】 神楽坂の歴史

1. 古代、中世期 ——受け継がれる地形と歴史
2. 江戸時代の神楽坂——まちの都市骨格を決めた神楽坂通り
3. 明治・大正時代の神楽坂——江戸期をそのまま引き継いだ神楽坂
4. 昭和時代——江戸情緒を引き継ぐ
5. 現在の神楽坂へ

【2】 神楽坂の地理

1. 全体像
2. 主な地名・名所

【3】 神楽坂の文化

1. 神楽坂と文学者
2. 神楽坂とその他の文化人
3. 神楽坂と文化施設
4. 神楽坂を舞台とした作品

【4】 神楽坂と建築

1. 神楽坂の名建築

【1】神楽坂の歴史

1. 古代、中世期 ——受け継がれる地形と歴史

（1）古代の神楽坂

縄文時代、地球の気温は現在よりはるかに高く、海水が武蔵野台地を洗い、牛込台地の奥深くまで入り込んでいた。

平成12年（2000年）現アインスタワーの建設工事にもともない、埋蔵文化財の発掘調査が行われた。ここは明治40年まで行元寺が建っていたところで、寺の礎石建物跡や井戸の跡などは勿論のこと、最下層からは貝塚跡とおぼしき縄文時代の生活跡が発掘され、縄文土器や石鏃の破片が出土した。また平成13年（2001年）、神楽坂4丁目の東京理科大学森戸記念館の建設工事にもともなう埋蔵文化財の発掘調査が行われたが、下層からは縄文土器や須恵器、土師器などの破片が発見されており、神楽坂には紀元前の縄文時代から現在にいたるまで人が住み続けていたことがはっきりした。

（2）中世の神楽坂

①「太田道灌の城づくり」

長禄元年（1457年）道灌は、鎌倉の執事（後の関東管領）扇谷上杉房顕が弱年であったため、主君と計り古河公方に当たるため江戸城を構築（千代田の地）し、城のまわりに社寺も戦略的に整備した。その一つが、正安2年（1300年）に創始された赤城神社を寛正元年（1460年）、牛込台下の田島の森から番町台へ遷座したことだ。また文明10年（1478年）に道灌によって江戸城の鎮守として創建されたという筑土神社は、はじめ江戸城三の丸にあったが、後に田安台に移り、徳川秀忠の時代の元和二年（1616年）に牛込筑土八幡町に移転している。

②「牛込に大胡氏登場」

神楽坂の町は、大胡重行と勝行の登場によって始まるといわれている。大胡氏は、平将門の乱で天慶3年（940年）に平貞盛と協力して4000の兵で将門を攻め滅ぼした下野押領使藤原秀郷（倭藤太）を祖と仰ぎ、藤原姓足利氏の支族と称した有力な士豪である。足利太郎成行の三男が、群馬県赤城山麓の勢多郡大胡（現前橋市大胡町）に居住したことから、大胡氏を名乗ったという。大胡氏そのものは、当時管領上杉の旗下で行動していた。それが牛込に何故移住したかは明確ではない。

神楽坂地域の牛込の名は、「込」という文字が多く集まるとの意味から、「牛込」とは牛の多い場所、駒込が馬の放牧場を意味したことを考え合わせると、牛の放牧場だったというのが一般の説だ。文武天皇4年（700年）の『続日本紀』の記述に各地の牧場が作られたとあり、大宝元年（701年）の大宝律令により、武蔵の国には檜前馬牧と神埼牛牧の二つの牧場が設けられ乳牛院という飼育舎が建てられたとあるが、それが現在のどこに当たるかは分かっていない。

牛込での大胡氏の頭領は大胡重行（1465～1543年）で、移住地は現在の地名でいえば新宿区の弁天町であった。

③「牛込城築城」

大胡重行は、袋町へ牛込城を築城し、そして牛込氏を名乗るようになる。大胡氏が公式に牛込姓を得たのは、その子勝行の代であったが、実際は重行の時から牛込で通していたと云われている。城は袋町を中心に、現在の若宮町、北町、中町、南町、砂土原町、弘方町、神楽坂4・5丁目の一部、いわゆる牛込台地の南側一帯に築かれたと考えられる。本丸とおぼしき場所は8~90メートル四方になる。この牛込の地は以前から牧があり、周囲を川と急坂に囲まれた丘の突端で見通しが良く、外敵から身を隠すにはこれ以上に適した土地はない絶好の場所だった。周囲と城の工作物を見てみると以下のようなになる。

東側：善国寺辺りまで崖になっていて、現在でもはっきり分かる。この濠から流れる水は谷となって現熱海湯前を流れていた。

西側：南町辺りを水源とし、中町、北町通りを直角に通り南藏院の池にそそいでいた沢跡。

南側：沼地（現外濠通り）からそそり立った急な崖上。

北側：現在の太久保通りで当時牛込川の谷。

大手門：東京三菱U S J銀行から旧宮坂金物店辺り。

井戸：豊富な水源を持っていた。

防御：石垣は殆どなく、自然の地形を利用した平城で、主として土塁と空壕で守られていた。

非常の際の「守り」は、若宮八幡神社の台地であり、相馬屋の裏庭には石垣の一部が現存している。

立て替え時に石垣を取ろうとしたが、堅牢であるためそのままにしたもの。

この牛込城の築城と大胡氏の入城に伴い、その一帯が回輪となり、神楽坂の「市街化」がはじまった。

2. 江戸時代の神楽坂——まちの都市骨格を決めた神楽坂通り

（1）家康と家光の江戸都市づくり

①「家康の都市づくり」

家康が考えた江戸は、まず軍事都市である。そのために3つの大工事を構想し、工事をした。

第1は、道三堀（ほぼ現在の日本橋川）の建設。第2は、江戸城の前まで入り込んでいた日比谷入江の埋め立てである。

そして第3は、平川と呼ばれていた川（赤城神社裏の現神田川）の大改修工事である。平川は以前は飯田橋から九段下を通り日本橋の方に流れていたのだが、この川は度々溢水して市街地を水浸しにする。そこで飯田橋のところから流れを直角に曲げ、現在のように水道橋、お茶の水から隅田川にと流れを変えた。

次に家康が着手したのは、江戸入城1ヶ月後の天正18年（1590年）から局沢（現在の皇居付近）や牛込、平川村（現在の大手門付近）、芝崎（現在の神田付近）にあった寺院を移転させたことである。

おそらくこの頃に牛込城の取り壊しが行われたと推測される。江戸城に近すぎるのと、城の位置が高過ぎることが目ざわりだったに違いない。

②「家光の都市づくり」

「粋なお江戸の坂のまち」は戦後、神楽坂のまちにとってのキャッチフレーズであるが、その坂が380数年前に姿を現した。

中世から神楽坂の主な通りは、鎌倉街道の支線の古道である軽子坂であり、その坂下からは下総の国府に向かう国府道に通じていた。また同時にその古道は、軽子坂を上がって行元寺裏を抜け、白銀町の瓢箪坂から白銀公園の東側を通り、赤城神社前の赤城坂を下って天神町方向に抜けていく鎌倉街道や上州道へ通じていた。現在も生きている白銀公園の側道や赤城下町の道幅は、その当時の姿を示している。その神楽坂の古道に並行するように、寛永13年(1636年)道幅12メートルの御成通り(現神楽坂通り)が造られた。ただし、12メートル幅は今の久保通りあたりで、その先は約1間半(2.7メートル)の普通幅であった。

これにはある狙いがあった。それは寛永5年(1628年)に牛込に下屋敷を与えた若狭小浜藩主酒井忠勝(12万3500石)のもとに通じる道の造成である。したがって、神楽坂通りは将軍家光も酒井家に行く際にたびたび使った御成道であった。

また、家光が行った事業で欠かせないのが、江戸城最大の難工事の外濠の切削である。寛永13年(1636年)から始まった外濠の工事は、戦後に埋められて上智大学のグラウンドになった真田濠を起点に谷筋の川幅を拡張していくものだった。この外濠の工事は、約20年以上かかる大工事だった。それが済むと幕府は政宗の孫の綱宗に命じて、前にもふれたが神田川の川幅を広げた。

これら神楽坂通り、外堀の整備と同時期に、神楽河岸が造られ、そこが物流の拠点となって、神楽坂上地域にまで発展が及ぶ大きな契機となった。

そのほか、牛込橋、牛込御門は寛永13年(1636年)に建設され、東海道の虎ノ門及び甲州街道の四谷門などと共に重要な位置を占めている。

3. 明治・大正時代の神楽坂——江戸期をそのまま引き継いだ神楽坂

(1) 東京遷都

明治4年、東京遷都が決まると、東京の各地から神楽坂に人が集まってきた。敷地分割の進展により、政府の役人に加えて、新しい住民がスムーズに住み着き、それに伴い昔からの町人地や門前町に商店が増え、そこに花柳界の出現でおもわぬ発展を見ることになる。明治6年には武家屋敷と門前町は市街地に完全に組み込まれ、神楽町1～3丁目・上宮比町・肴町・若宮町・袋町・揚場町・通寺町・横寺町などは、毘沙門善国寺を核として行元寺や肴町・通寺町・横寺町の江戸時代の門前町の賑わいをそのまま引き継ぐことになった。

明治10年、西南戦争の景気で神楽坂は完全に活気が戻り、日本銀行が開店する1年前の明治13年には通寺町に東京貯蓄私立銀行が創立され、商業の発展の後押しをしている。人口の増減と町の隆

盛はいちがいには論じられないが、文政年間（1818～1829）の『牛込町方書上』から牛込区の人口は5.5万人と推定され、明治維新直後は3.6万と65%に落ち込んだものの、以降徐々に増えていき、明治40年頃には11.6万人と倍化している。

神楽坂に限っていえば、牛込区の人口増と同じで、明治37～38年の日露戦争の頃と大正12年の関東大震災後の山の手銀座といわれた頃が、一番賑わった時代といえよう。

（2） 商業地の発展

神楽坂には江戸期から続く老舗が多かったが、その中で群を抜くのが、相馬源四郎商店である。光照寺に残る過去帳に万治2年（1659年）の記載があり、少なくともそれ以前から存在したことは確かだ。続くのは寛政8年（1796年）、山の手を代表する官営病院御用薬舗の「尾沢総本店」であり、現在は廃業してオザワビルの1階には新宿神楽坂郵便局が入っている。文政5年（1808年）には漬物の「甲州屋」が創業し、のちの代の「山本薬局」となっている。弘化年間（1844～1847年）には花屋の「花豊」が創業するが、神楽坂というより東京でも最も古い花屋である。乾物屋の「塩清」は、赤城神社に記録をとどめる酒井家御用達、スーパーキムラヤの裏手正藏院門前町にあった。「飯塚酒店」もこの頃の創業で、朝日坂通りに入ってすぐ右手にあった。官許「にぎり酒」の醸造で知られ、貧乏文士にはなくてはならない酒所であった。文久2年（1862年）には乾物屋の伊勢屋が創業し、それに続く慶応年間に入ると「紀ノ善」が創業している。維新後は「紀の善 花蝶寿司」、戦後は汁粉屋で今の甘味どころ「紀の善」である。

明治に入ると新政府の政治家や役人の来街者が次第に増え、毘沙門様の賑わいと相まって、明治2年には江戸より龍慶橋の鰻卸商であった牛鍋屋の「島金」が開店している。当時、店は小路の奥にあり、表通りに「蒲焼」と書かれた「島金の辻行燈」が出されていた名店であり、現在は割烹・うなぎの「志満金」となっている。同じ明治初年頃の創業に糸商の「菱屋商店」がある。明治10年代には「宮坂金物店」など、現在にも残る店舗が続々と創業している。

江戸末期からこのころまで善国寺の毘沙門様の名は東京中に知れ渡っていたが、更に賑わったのは明治20年の東京で最初の夜店からといっても過言ではない。

明治に入ってから、明治20年代に後のフルーツパーラー「田原屋」の前身の牛鍋屋が開業し、作家の原稿用紙で「相馬屋」と双璧をなす「山田紙店」、現在の「丸岡陶苑」の前身「岡崎陶器店」や「河合陶器店」、明治30年に入ると菓子店「紅谷」、当初は1階が「あやめ寿司」2階が中華料理「龍公亭」、銀座木村屋の支店パンの「木村屋」などと、有名処の開店が続くことになる。明治40年代に入ると、履物・和傘の「助六」、印章の「岡田印房」、帽子と洋傘の「ヤマダヤ」など創業が相ついでいる。

（3） 花柳界の発展

神楽坂花街の始まりは、天明8年（1788年）に肴町の行元寺の境内の東一帯を武家住居の貸地にしたことに始まる。この貸地や門前町の一部に、寺僧相手の遊行の場、いわゆる非官許の遊里である岡場所が発生した。

明治7年に発生した火事によって神楽坂花街は全焼してしまい、正確なことは分からなくなってしまっているが、西南戦争の好況で花柳界は活気づき、日清戦争前には10軒だった料亭も15～16

軒が増え、徐々に花街としての成長は続いたと考えられている。

明治38年(1905年)で芸妓112人、半玉8人の計120人は当時25ヶ所あった花街では8番目の多さであったという。ちなみに新橋は389人で群を抜いていた。続いて浅草279人、葎町264人、下谷数寄屋町・同朋町に238人、赤坂178人、新橋烏山162人、柳橋161人、それに神楽坂が続いた。東京全体では約2700人の芸者がいた。

明治40年に行元寺が品川に移転し、その跡地が三業地になり、その後大正12年(1923年)の関東大震災時は、牛込台という地形に守られて被害が軽微であったために、下町の大きい百貨店の仮店舗出店地として神楽坂が巷間の注目を浴び、芸者衆も多く集まり、その数約600人、待合茶屋300軒といった東京でも最有力の花街になった。

(4) 関東大震災

大正12年(1923年)9月1日午前11時8分、相模湾を震源としたM7.9の大地震が発生した。のちに関東大震災とよばれたこの地震で、東京府内の死者・不明者は約10万人、とくに地盤が弱く、加えて住宅の密集していた下町は、壊滅的な被害を受けた。同時に発生した火災によって約40万世帯が被害をうけて、東京下町の市街地消失率は44%にも及んだ。

神楽坂は、牛込台地という頑丈な岩盤の地形に守られ、さして被害は見受けられなかった。それにより、下町にあった三越の分店や松坂屋の臨時売り場、高島屋、白木屋、明治製菓、プランタンなどの銀座の有名店が軒並み神楽坂に店を出したこともあり、以前に増して神楽坂は賑わった。この後の昭和に入って新宿、渋谷、池袋の駅ターミナル化の到来によって大方の客層が移動していくまでの数年間が、おそらく神楽坂にとって最高のまちの賑わいであった。

4. 昭和時代——江戸情緒を引き継ぐ

(1) 伸び行く新宿と神楽坂の凋落

大正15年12月15日、大正天皇が崩御されて、年号は昭和と改まった。

つい10数年前までは新しい山の手の盛り場の星として光っていた神楽坂は、新宿、渋谷にその地位を奪われて凋落した。

年々値上がりする新宿に比べて、神楽坂の地価は暴落した。評論家でジャーナリズムに名声を博していた時代の寵児、大宅壮一(1900~1970年)は、その頃の神楽坂についてこう述べている。

「神楽坂は全く震災で生き残った老人のような感じである。銀座のジャズ的近代性もなければ新宿の粗野な新興性もない。空気がすっかりよどんでいて、右にもひだりにも動きがとれないようである。……神楽坂といえば東京でも有名な盛り場だが、恐ろしく活気がない。街がどことなく湿めっぽくてかび臭い」(「文芸倶楽部」昭和5年)

大変な言われようである。確かにたくさんの職人を抱え店先に作業場がある店が多く、漬物屋は店先に自家製の漬物樽を並べ、お茶屋は店で茶をひいており、餅屋は暖簾の奥で餅をつき餡を煮て

いた。どちらかといえばかたくなに江戸、明治、大正の伝統を守る老舗が多かった。たとえ昭和になり時代遅れといわれても、既製品が大量に出回る銀座や新宿に対して、平然と店の形態を変えず頑固に守り通す店が多かった。現在になっても神楽坂には、こういった雰囲気は「まちの遺伝子」として残されている。

一方で、戦前は花柳界の最盛期であり、新旧2つの見番に芸者置屋が166軒、芸妓数は619名を数えるほどになっていたが、その後の開戦後、戦争の長期化につれて贅沢や華美さが疎まれ、賑わいは下火になっていった。

(2) 第二次世界大戦－東京大空襲

昭和20年3月10日の東京大空襲の際には、神楽坂が難を逃れたものの、4月12日夜11時伊豆方面から北上した350機のB29が飛来して牛込、淀橋、王子を無差別に主焼夷弾の雨を降らせた。神楽坂周辺も相当これにより燃えた。そのため押しが5月24日の夜半の空襲だった。銃後を守っていた在郷軍人会の班長や婦人会の町を守る団結力もおびただしい焼夷弾の威力には勝てず、坂上から火の手が上がったと見る間に、坂の各所から炎が上がり、「靖国に避難を」と呼びかけるいとまもなく、一面が火の海になった。その空襲に遭った人々は、「牛込見附から外濠の土手に逃げ上がるのがやっとのことで、神楽坂が燃え上がるのを見ながらただ茫然と立ちつくすだけでした」。「神楽坂の町が燃える炎が濠の水面に真っ赤に揺らめき、悔しさで涙も出ませんでしたね」と、述懐している。それまで爆撃の被害をかるうじて最小にとどめていた神楽坂も、この時の2時間ほどの火災で完全に灰燼に帰した。

思えば江戸時代徳川家康の都市づくり以来、約340年余の町の安寧を享受してきた東京では希有なまち神楽坂も、ついにここに至って激しく炎上した。

(3) 神楽坂の復興

昭和25年、朝鮮戦争の好景気にバラック建ての店が消え、ようやく商店がそろい始めた。

坂下から見て右側に山田紙店、紀の善、左手には翁庵、志満金、オザキ靴店、夏目写真館、龍公亭、助六と老舗が復活してきた。そんな時期の27年、「ゲイシャ・ワルツ」が突然大ヒットして神楽坂の花柳界が全国的にその名を轟かせた。作詞はかの西条八十、作曲は古賀政男、歌手はこの地で美声が知れ渡っていた神楽坂はん子だった。

神楽坂の花柳界は戦後いち早く復興して、鉄鋼業界の有力者や政治家などが料亭を多く利用したこともあり着実に成長を遂げていただけに、この曲のヒットは朗報だった。関東大震災直後の数年間に栄えた神楽坂花柳界が再び活況を呈した。最盛期には芸妓数200名以上、料亭も約80軒を数えた。

「もはや戦後でない」と宣言したのが昭和31年、続く冷蔵庫、洗濯機、掃除機の三種の神器がもてはやされ、神武景気の後のなべ底不況から脱した34年からの岩戸景気で日本経済は成長期に入った。神楽坂の花柳界も盛況で、料亭75軒、芸者衆300～400名とふくれあがっていたが、そろそろ絶頂期を過ぎ減少期に入っていった。

(4) 戦後の花柳界の変遷

昭和30年代後半からは料亭数が65軒と減少し始め、地盤にしていた自民党の田中角栄内閣が発足

した47年で50軒を割り、芸者数も180人、翌年のオイルショックを経た52年で40軒、56年には30軒、61年のバブル期突入の時ですら30軒を割り込み28軒、芸者数も100人弱となった。毘沙門裏の料亭「松ヶ枝」もオーナーの死後取り壊され、しばらく駐車場になっていたが、現在ではマンションになっている。昭和63年、老舗の料亭がいくつか店を閉め25軒になり、その跡地は軒並みマンションが建ち、昔ながらのまちの情景が失われつつあった。

5. 現在の神楽坂へ

(1) 周回遅れからの出発

神楽坂通りでは、バブル期をはさんで戦後まもなく建った木造の建物は次々に消え、新しいビルに建て変わった反面、戦後の建物が結構あちこちに挟まれて残っていた。間口の狭いビルが上に伸びていったという感じと、高さは新宿区の規制で5~6階くらい、それが隣のビルとの境が分からないくらいに接して建った。1つ1つの建物はデザイン的に優れていても、やたらと雑多な看板が多く、全体的にはもうひとつという感じだった。まちとしても他のまちに比してイメージの強烈さもないし、古いまちに比しても新素材のアーバンファニチャーをふんだんに使用した整備があるわけではなかった。電線の地中化といった都市基盤の初歩の実施計画も俎上にあがっていなかった。住民にとってはここに至って都市整備をめぐる「周回遅れ」をいやというほど感じざるを得ない状態だった。そんな中で特記すべきことは、遡ること昭和63年10月、新宿区が「新宿都市整備方針」を策定し、21世紀を展望して計画的、総合的にまちづくりを推進することになっていた。幸いにもその方針のなかで、「神楽坂・飯田橋地区」は、広域的な都市活動拠点として位置づけられた。ただちにまちづくりの基礎調査が行われ、平成2年(1990年)に入ると新宿区都市整備部から「まちづくりニューズ第1号」が出された。周辺住民のアンケート調査の一部を紹介してみる。

- ・ まちの良い点—「便利な場所に立地」し、「江戸期からの伝統と歴史」。
- ・ まちの悪い点—「駐車場も不足」「道路が狭い」。
- ・ まちの将来像としては「昔の良さを活かした情緒のあるまちであってほしい」「あまり変わらないでほしい」が圧倒的であった。

翌3年7月19日に「まちづくりの会」(出席者32名)が発足し、活動のスタートをきった。

(2) ヒューマンスケールのまちをめざして

「周回遅れ」の嘆きは、バブル崩壊後は土地の個性が保全されたという意味で、良かったというべきであった。神楽坂に求められたものは、誰いうとなく皆が納得したまちが「ヒューマンスケール」であり、通りの「幅の丁度良さ」であり、江戸情緒を伝える「建物、横丁、路地の風情」であり、神楽坂が神楽坂であるための「歴史や伝統、文化の保全」であった。しかもそれが現代と無理なくまざり合いながら、安心して住み続けられることであった。

まちづくりの目標・方針・憲章に、それらをきちんと入れたものを住民と行政の協同で作あげたことは、特筆に値するものだった。これはバブル期に「ないものねだり」をしてまちを過剰に飾り、

住民を住めなくした多くのまちと違って、神楽坂では「まちの遺伝子」を自覚して、すでにあるものを「磨こう」とした住民の力によるものだったのかも知れない。

ともあれ「まちづくりの会」で検討されたメインの課題である、「伝統と現代がふれあう粋なまち—神楽坂—」の旗印のもとで、「街並み環境整備事業」が導入され、その実現は神楽坂通り商店会に託された。

神楽坂通り沿道(1~5丁目)では、商店会会員の度重なる議論とリーダー層の大いなる努力の結果、平成9年「まちづくり協定」が締結されるに至った。この協定は「親しみやすいスケールの街並みを活かす」「個々の建物で演出・工夫をしていく」という考え方のもとに、主要な4つの項目を定めていた。

- ・ 街並みの連続性をつくる—壁面線をそろえる。
- ・ 親しみやすい街並みをつくる—高さ(形態)をおさえる。建物の高さは6階までとして、7階以上の部分は後退する。
- ・ ゆとりと粋な工夫のための空間—店先空間(敷地)を整備する。
- ・ 粋な工夫をする—意匠等の工夫につとめる。

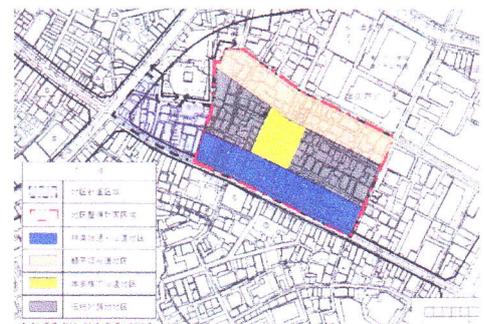
(3) 超高層マンション建設計画と地区計画

平成12年4月に起こった超高層マンション建設計画反対運動を経て、「神楽坂超高層マンション対策協議会」はその知見に基づき、翌13年に「神楽坂4・5丁目地区地区計画」の早期策定の請求を求める陳情を行った。「『神楽坂』らしさと生活環境を守り伝えるために『地区計画』を！」の旗印のもと、その内容は、①「まちづくり協定」の努力を「地区計画」にきちんと位置づけて、活気ある商店街をつくりたい(この高層マンションは「まちづくり協定」に結ばれているエリアからわずか30mしか離れていない)、②「神楽坂らしさ」を残す迷路のような路地空間を守りたいなどであった。署名運動及び説明会が行われ、その後区議会にて採択された。これは「まちの遺伝子」を守り抜く活動でもあった。

これにより地区計画が策定されると、都市計画法に基づく「都市計画」として法的ルールとして明確になる。平成16年11月には地域の代表となる町会や商店会を始め神楽坂で活動しているNPO法人粋なまちづくり倶楽部、神楽坂まちづくりの会も加わり、神楽坂地区のまちづくりに取り組む「神楽坂まちづくり興隆会」が発足した。

早速、「神楽坂3・4・5丁目地区 地区計画」の地区計画が検討され、平成19年9月新宿区都市計画審議会の審議を経て決定するにいたっている。策定の実現に尽力した方々の活躍は、目を見はるものがあった。その間、17年には「神楽坂本多横丁—小粋な横丁づくり協定」が締結され、街並み環境整備事業が実施された。以降まちづくりの骨子となることは、この興隆会が受け持つことになる。

まちを守り、発展を促進させる体制が出来あがったことは、神楽坂の保有する底力が発揮されたことと言えるだろう。また、江戸時代から引き継いできた住民の心意気が発揮されたともいえよう。



(4) 大久保通り拡幅問題

現在、大久保通りを18mから30mに拡幅する計画が進行しており、神楽坂のまちが分断されるのではないかという懸念が大きくなっている。

これだけ活気のあるまちとなった神楽坂をより発展させていくためにも、単純な拡幅となることは避けたいとの思いから、「神楽坂まちづくり興隆会」の諮問機関として「神楽坂粋なみちづくり推進委員会」を発足させ、拡幅に関する様々な問題解決に取り組んでいる。

< 神楽坂の歴史関連 地図 >



【2】 神楽坂の地理

1. 全体像

神楽坂は、武蔵野台地から南東方向に延びた手の指状の支脈のひとつである牛込台地の突端部に位置し、高低が入り組んだ複雑な地形となっている。行政区としては新宿区の北東に位置し、神楽河岸から神楽坂1～6丁目があり、市谷船河原町、揚場町、若宮町、津久戸町、袋町、岩戸町、白銀町、横寺町、矢来町、赤城元町に隣接する。また南東側は江戸城の外濠を挟んで千代田区に接している。神楽坂通りは、外堀通りの神楽坂下交差点から北西に延びて早稲田方面に向かう道であり、地下鉄神楽坂駅辺りまでが「神楽坂」とみなされるおおよその範囲である。東京都による道路名称は「早稲田通り」である。

延長約750m、幅員約10～12mで、坂下交差点から傾斜7～8%の登り坂から、一旦、大久保通りとの坂上交差点に向かってやや下りになり、坂上交差点を過ぎると再び上りに転じ、神楽坂駅手前で標高25m程度に達する。

沿道は、商店街で坂下交差点から大久保通りまでの1～5丁目が「神楽坂通り商店会」、大久保通りからの6丁目は「神楽坂商店街振興組合」となっている。それぞれの神楽坂通りからの後背地も、花街の雰囲気を残す路地、横丁地区と寺社、寺町地区に分かれている。この通りは、昭和33年以降、午前と午後で逆転式一方通行が採用されているが、これは全国的にも稀なもので、後に首相となる田中角栄氏が、目白から国会議事堂への通勤の便宜を諮ったとの都市伝説が生まれた。

また1～5丁目地区では住民による「まちづくり」が行われて来ており、平成6年に「神楽坂まちづくり憲章」、平成9年に「神楽坂通り沿道1～5丁目まちづくり協定」、平成19年に「神楽坂3・4・5丁目地区 地区計画」が制定されている。

軽子坂通りは、神楽坂通りの北側に平行して走る幹線道路であり、江戸時代から神楽坂の物流を支える道として機能している。また建築形態の明確な境界でもあり、神楽坂通り側では小さな空間スケールが保持されるが、大久保通り側は、再開発等により大半が大規模ビルによって占められる。この神楽坂通りを背骨として、南北に肋骨のように横丁がある。仲通り、本多横丁、小栗横丁、見番横丁、地蔵坂（薬店）等がそれであり、神楽坂通りから少々入ると花街、住宅地、寺社地になる。幅員は4～6m、延長は長くとも230mで、それぞれがまとまり感や個性を持っている。

さらに花柳界由来の情景情感が保たれている伝統的な路地があり、かくれんぼ横丁、兵庫横丁、熱海湯階段がその代表である。沿道には、今でも道に寄り添った板塀や木造建築が多く存し使われており、滲み出す緑と相まってしっとりとした風情が醸し出されている。みちは石畳で仕上げられ、曲りや階段を上下する。これらの路地は、前述の通りや横丁が公道であるのに対し、私道であって車両等は入らず、もっぱら歩くみちである。

2. 主な地名・名所

(1) 大手門通り

毘沙門天と三菱東京UFJ銀行の間の通りは、中世に築かれた牛込城の大手門（正門）に通じていた。明治時代には「松が枝」（現在はマンション）という神楽坂で一番大きな料亭ができ、昭和時代には大物政治家の出入りも煩雑であった。

この通りの枝道の突き当りに見える擁壁は、牛込城本丸の土塁の跡である。

(2) 小栗横丁

小栗という姓の武家屋敷がこの通りの両端にあったことから、小栗横丁と呼ばれた。かつては片側（北側）に幅1尺ほどの小川が流れており、この地に湧水が豊かであったことの証である。

通りの中ほどに銭湯「熱海湯」があることから、「熱海湯通り」とも呼ばれる。

(3) 見番

花柳界（花街）とは、料亭があり芸者さんが行き来する地区や社会を指し、見番は芸者衆の手配、玉代の計算などを行う花柳界の事務所や稽古場のことで、正式名称は「東京神楽坂組合」。

神楽坂花柳界の最盛期には700人近い芸者衆がいたが、現在は30人ほど。なお今日、東京には代表的な花柳界として、神楽坂のほかに、赤坂・浅草・新橋・向島・芳町がある。

(4) 芸者新道

明治時代にできた道で、以前は「ロクハチ」（宴席の始まる夜の6時と8時のこと）ともなると、お座敷に出るお姐さん達が一刻を争って近道に利用した。

この通りの東端は傾斜が急になっているが、これがかつての神楽坂通りとほぼ同じ傾斜である。

(5) 軽子坂

神楽坂通りの北東側を並行する坂である。鎌倉時代に武蔵国府中と下総国国府台の両国府を結ぶ道として整備されたもので、神楽坂通りより古い歴史を有する。

江戸時代には、神楽河岸で荷揚げされた米などの荷を軽籠(かるこ)を背負って運搬する人夫達(軽子)がこの地に多く住み、行き交っており、坂の名はこのことに由来する。

(6) 三年坂

本多横丁を含み、筑土八幡神社へ至る緩やかな坂である。堀部安兵衛が高田馬場の決闘に向かった際、ここを駆け抜けたとも言われる。

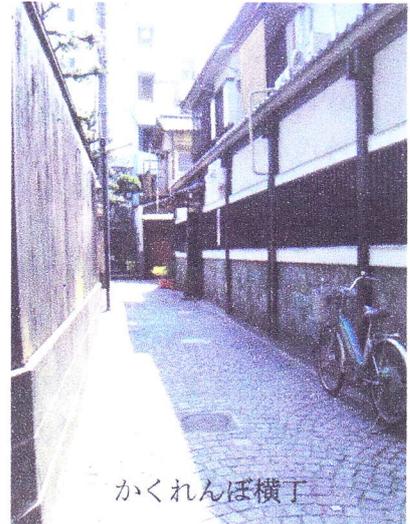
名の由来は、寺や墓地に囲まれた静寂な場所をつまづくと3年のうちに死ぬ、死なないためには3度土を舐めよと言われた俗言による。

(7) 本多横丁

名称は、この横丁の東側にあった徳川家家老「本多対馬守」屋敷に由来する。一時「すずらん通り」と呼ばれたが、昭和50年頃に戻された。両側に寿司屋・鰻屋・居酒屋等が並び、「芸者新道」「かくれんぼ横丁」などの路地にもつながる賑やかな通りである。

(8) かくれんぼ横丁

最も「神楽坂らしい」雰囲気を保っている路地のひとつである。石畳や黒塀、さりげないけれど趣向を凝らした建築などを味わいながらのまち歩きは、神楽坂ならではのもの。



かくれんぼ横丁



兵庫横丁

(9) 兵庫横丁

神楽坂の代表的な石畳の路地のひとつであり、元は3尺程度の幅であった。料亭のほか、著名作家が逗留して執筆活動を行うことから「本書き旅館」として知られる「和可菜」などがある。

(10) 寺内公園（行元寺跡）

現在、超高層マンションが建ち寺内公園がある一帯は、明治40年の土地区画整理で西五反田に移転した「行元寺」という広大な寺であった。江戸後期には寺の境内を町屋として年季貸しするようになり、家が立ち並ぶにつれて迷路のような路地ができた。また、境内の一部が遊興の場となり、そこから神楽坂花柳界が発祥した。

(11) 地蔵坂（わらだな横丁）

毘沙門天を少々神楽坂上方面に行ったところから光照寺方面に上る坂。坂の名は、光照寺の子安地蔵が信仰を集めたことと、境内に住む狸が地蔵に化けて夜な夜な坂を通る人を脅かしたということから命名された。

また、薬を扱う商店が多かったことから薬店（わらだな）横丁とも呼ばれる。

(12) 光照寺

旧牛込城本丸跡にあり、牛込氏が徳川家光によって移封された後、1645年に神田から移転した。羽後国（秋田・山形地方）松山藩主酒井家の歴代藩主一族の墓や、神田松永町旅籠屋紀伊国屋利八が、その旅籠に逗留中に倒れて亡くなった人々を弔った諸国旅人供養碑（1825年）などがある。

(13) 毘沙門天(善国寺)

江戸中期の寛政4年(1792年)に移転してきた日蓮宗池上本門寺の末寺で、神楽坂の中心として親しまれ続けている。

江戸時代から後々まで、境内にある毘沙門天(寅の日)と出世稲荷(午の日)の2つの縁日で賑わい、年に4度の寅の日に本尊の毘沙門天(新宿区文化財)が開帳(一般公開)される。

新宿七福神のひとつである。

(14) 筑土八幡神社

応神天皇・神宮皇后・仲哀天皇を祭神とする区内屈指の名社である。

往古、管領上杉氏の砦で豊前宇佐八幡宮の土を取り寄せて基礎を築いたことから筑土という。

境内には1664年の銘がある猿の庚申塔(新宿区文化財)、区内最古の石造り鳥居(1726年 新宿区文化財)、「金太郎」「浦島太郎」などの愛唱歌を作曲した、作曲家 田村寅蔵の顕彰碑がある。

(15) 神楽坂若宮八幡宮

源頼朝が、東北の藤原氏と義経討伐の折、この地で下馬して祈願したとされ、奥州平定後この地に鎌倉の鶴岡八幡宮のご神体を勧請した。仁徳天皇・応神天皇を祭神とする由緒ある社で、かつては周辺の高台すべてを境内としていた。

(16) 江戸城外堀跡

徳川家光の一大事業として造られたもので、現在神楽坂に近い牛込濠と新見附濠、市ヶ谷濠、弁慶濠が残っている。飯田濠は1970年代に埋め立てられて暗渠になり飯田橋セントラルプラザが建てられている。現存する牛込門等の石垣は国指定史跡で、南側の土塁は桜で有名な外濠公園となっている。

(17) 東京理科大学

明治初期に設立された東京物理学講習所(後に東京物理学校)を前身とする、理学系学部を中心とする私立大学である。神楽坂には明治後期よりキャンパスを設け、平成3年に建設された近代科学資料館はその当時の木造2階建ての外観を復元したもの。近年はPORTA神楽坂の開発も手掛け地域と共に歩む。

(18) 熱海湯階段

見番横丁から小栗横丁に下る急峻な路地で、その昔芸者たちが熱海湯で入浴し化粧を整えてお座敷に出かけたことから「芸者小道」とも呼ばれる。造成されたのは明治後期以降であるが、明治期に寄席があり大正期には花柳界として栄えた。



熱海湯階段

(19) 赤城神社

鎌倉時代、上野国赤城山麓から牛込に移住した大胡氏が、本国の鎮守であった赤城神社の御分霊を早稲田の田島村にお祀りしたと伝わる。戦国時代に現在地へ移り、江戸時代は徳川幕府により江戸大社の一つとされ、牛込の鎮守として信仰を集めた。

(20) 朝日坂

神楽坂通りから横寺町に入るこの坂は、かつて泉蔵院という寺の境内に朝日天満宮があった為この名がついたとされる。現在もお寺が数多く残る所であるが、「芸術倶楽部跡・島村抱月終焉の地」「尾崎紅葉旧居跡」等明治時代の文化の痕跡も残されている。

(21) 袖摺坂

朝日坂の通りから大久保通りへ下る両脇が高台と垣根の狭い坂道で、すれ違う人がお互いの袖を摺り合わせたと言われる。



< 神楽坂の地理関連 地図 >



【3】 神楽坂の文化

神楽坂では花柳界や毘沙門の縁日とともに、牛込菓店（地蔵坂）には江戸時代より「わら新」という寄席があり、さらに明治から大正にかけ「牛込亭」「柳水亭」などの寄席や演芸場ができはじめ、東京の各所から多くの人が集まるようになると、これらの文化に寄せられるように文豪や芸能人も神楽坂に集まるようになった。

文学界では、尾崎紅葉が横寺町に住み（明治24年、1891年～）、夏目漱石が山房を早稲田南町に開き、坪内逍遙が余丁町に住んだことにより、神楽坂は日本近代文学の発祥の地となった。特に紅葉については、野田宇太郎『新東京文学散歩 牛込地区』に「牛込、神楽坂一帯から横寺町にかけて近代の文士たちの出入りが繁くなったのは、尾崎紅葉の移住が先ず第一の原因である」と記されている。それくらい紅葉は名声が高かった。

夏目漱石は慶応3年（1867年）に牛込馬場下横丁（現喜久井町1番地）に生まれ、作家として人気が出た後、早稲田南町7番地（現漱石公園）に住居を移し、毎週木曜日に弟子や崇拜者たちの集まりを自宅に持った。山房に集まったのは寺田寅彦、和辻哲郎、内田百閒、野上豊一郎などそうそうたるものだった。

演劇界では坪内逍遙が、余丁町に住み、赤城神社境内の貸席「清風荘」で弟子の島村抱月が留学先のドイツからの帰国を待って、近代演劇のさきがけとなる文芸協会を設立させた。大正2年（1913年）、抱月と松井須磨子は芸術座を立ち上げ、『復活』で大当たりをとり、大正4年（1915年）暮れには待望の演劇小屋「芸術倶楽部」を横寺町に完成させた。

抱月が病死し、須磨子が後追い自殺後、芸術倶楽部は主を失い閉鎖となったが、関東大震災後、芸術座の理事だった水谷竹紫、女優の水谷八重子を中心に、大正13年（1924年）第二次芸術座が結成され、神楽坂三丁目の仲通り商店街の入り口にできた「牛込会館」で演劇復興公演が行われた。

時代の流れとともに「わら新」は寄席から芝居小屋を経て大正3年（1914年）映画館の「牛込館」となった。また明治40年頃、新設映画館の「文明館」も開館し、映画文化も発信するようになった。映画監督の黒澤明は学生時代にこれらの映画館に通い、また、寄席などの神楽坂の文化に触れ、「それが将来の私にどれほど役に立つかなどとは夢にも考えなかった」と後に懐想している

その他、音楽、絵画等の文化人も神楽坂に集まり、現在に至るまで多くの文化人が生活・創作の場としている。

文化、賑わいの中心であった神楽坂は、数多くの文化作品において舞台として描かれた。現在においても、これらの文化の香りを色濃く残した神楽坂を舞台にした小説や映画、漫画などが生み出されている。

また、現在、常設の寄席や芝居小屋等は存在しないが、「落語まつり」や毘沙門天書院での「毘沙門寄席」、まちを舞台とした伝統芸能のまつり「神楽坂まち舞台・大江戸めぐり」、地域の店舗、団体による「まち飛びフェスタ」が開催され、ギャラリーなど発表の場も増えており、現在進行形での文化の継承が行われている。

1. 神楽坂と文学者

(1) 夏目漱石

夏目 漱石（なつめ そうせき、1867年2月9日（慶応3年1月5日）～1916年（大正5年）12月9日）は、日本の小説家、評論家、英文学者。本名、金之助（きんのすけ）。江戸の牛込馬場下横町（現在の東京都新宿区喜久井町）出身。俳号は愚陀仏。

大学時代に正岡子規と出会い、俳句を学ぶ。帝国大学（後の東京帝国大学、現在の東京大学）英文科卒業後、松山で愛媛県尋常中学校教師、熊本で第五高等学校教授などを務めた後、イギリスへ留学。帰国後、東京帝国大学講師として英文学を講じながら、「吾輩は猫である」を雑誌『ホトトギス』に発表。これが評判になり「坊っちゃん」「倫敦塔」などを書く。



その後朝日新聞社に入社し、「虞美人草」「三四郎」などを掲載。当初は余裕派と呼ばれた。「修善寺の大患」後は、『行人』『こゝろ』『硝子戸の中』などを執筆。「則天去私（そくてんきょし）」の境地に達したといわれる。晩年は胃潰瘍に悩まされ、「明暗」が絶筆となった。

英国から帰った明治36年1月24日（1903年、37歳）から3月3日まで、妻の鏡子氏がいた牛込矢来町3番地中ノ丸の中根宅に滞在した。

(2) 尾崎紅葉

尾崎 紅葉（おざき こうよう、1868年1月10日（慶応3年12月16日）～1903年（明治36年）10月30日）は、日本の小説家。本名、徳太郎。「緑山」「半可通人」「十千万堂」などの号も持つ。江戸生まれ。帝国大学国文科中退。



1885年（明治18年）、山田美妙らと硯友社を設立し「我楽多文庫」を発刊。『二人比丘尼 色懺悔』で認められ、『伽羅枕』『多情多恨』などを書き、幸田露伴と並称され（紅露時代）明治期の文壇の重きをなした。1897年（明治30年）から『金色夜叉』を書いたが、未完のまま没した。泉鏡花、田山花袋、小栗風葉、柳川春葉、徳田秋声など、優れた門下生がいる。

明治24（1891）年3月から横寺町47番地の鳥居家の母屋に居住。別名、十千万堂。これから没するまで13年間をこの家で過ごす。「金色夜叉」もここで執筆する。

(3) 田山花袋

田山 花袋（たやま かたい、1872年1月22日（明治4年12月13日）～1930年（昭和5年）5月13日）は、日本の小説家。本名、録弥（ろくや）。群馬県（当時は栃木県）生れ。

尾崎紅葉のもとで修行したが、後に国木田独歩、柳田國男らと交わる。『蒲団』『田舎教師』などの自然主義派の作品を発表し、その代表的な作家の一人。紀行文にも優れたものがある。

明治十九年、十六歳で上京してから貧困時代、苦学時代、尾崎紅葉を訪ねて文学修業を積む習作時代を経て、自然主義文学の金字塔を建てる「蒲団」完成の前年三九年まで、十一回の転居を牛込区内でくり返し、牛込で二十年間を過ごした。そして牛込を異常になつかしく思い浮かべて「東京の三十年——山の手の空気」を書いている。

(4) 泉鏡花

明治・大正期の小説家・劇作家。本名は鏡太郎。1873(明治6年)年11月4日に生まれ、没年は1939(昭和14年)9月7日。65歳、癌性肺腫瘍のため死亡。明治23年(17歳)、牛込横寺町の尾崎紅葉氏(当時23歳)を訪ね、最初の門下となる。明治28年(21歳)、『夜行巡査』『外科室』を発表し、出世作に。明治32年(26歳)、神楽坂の芸妓、桃太郎(本名伊藤すゞ、当時17歳)と知り合う。同年、牛込南榎町に引っ越し。明治33年(27歳)、幻想譚『高野聖』を発表。明治36年(30歳)1月、神楽坂に転居し、すゞと同棲するが、3月、紅葉はこれを知り、叱責。すゞはいったん鏡花のもとを去り、同年10月、紅葉が死亡、晴れて夫婦に。明治38年(32歳)、逗子に転居。明治41年(35歳)、『婦系図』を出版し、帰京。

(5) 北原白秋

北原 白秋(きたはら はくしゅう、1885年(明治18年)1月25日～1942年(昭和17年)11月2日)は、日本の詩人、童謡作家、歌人。本名は北原 隆吉(きたはら りゅうきち)。詩、童謡、短歌以外にも、新民謡(「松島音頭」・「ちゃっさり節」等)の分野にも傑作を残している。生涯に数多くの詩歌を残し、今なお歌い継がれる童謡を数多く発表するなど、活躍した時代は「白露時代」と呼ばれる近代の日本を代表する詩人である。1907(明治40年)12月から翌08(明治41年)10月まで牛込区北山伏町33番地、翌09(明治42年)8月までは牛込区神楽坂2丁目22番地に居住する。8月からは本郷区に移り、再び10(明治43年)2月、牛込区新小川町3丁目14番地に転居を経て、9月、青山原宿に転居する。



(6) 菊池寛

菊池 寛(きくち かん、1888年(明治21年)12月26日～1948年(昭和23年)3月6日)は、小説家、劇作家、ジャーナリスト。文藝春秋社を創設した実業家でもある。本名は菊池 寛(きくち ひろし)。1916年(大正5年)に京大卒業後、時事新報社会部記者を経て、小説家となる。1923年(大正12年)に私費で雑誌『文藝春秋』を創刊し大成功を収め、多くの富を手にした。日本文藝家協会を設立。芥川賞、直木賞の設立者でもある。大正13年に牛込神楽坂のカフェ・プランタンで麻雀を覚え、大正14年に麻雀シーンを取り入れた小説「第二の接吻」を連載するなど、麻雀や競馬に熱中していたことでも知られ、麻雀では日本麻雀聯盟初代総裁を務めた。競馬では『日本競馬読本』は競馬入門本として現在でも評価が高い。

2. 神楽坂とその他の文化人

(1) 宮城道雄

宮城 道雄（みやぎ みちお、1894年（明治27年）4月7日～1956年（昭和31年）6月25日）は、兵庫県神戸市生まれの作曲家・箏曲家である。旧姓は菅（すが）。十七絃の発明者としても知られる。大検校であったため、広く「宮城検校」と呼ばれた。

『雨の念仏』（1935年）などの随筆により文筆家としての評価も高い。

大正7年に市ヶ谷田町2丁目23番地の家に転居。3間くらいの部屋数の古ぼけた家。入口に「宮城大検校」という大きな看板をかかえて、内弟子をとる。大正8年5月ごろ、牛込払方町25番地に借家。これは広い坂を上りきった左側にあった家で、もと、石川啄木が住んだ大和館という下宿の跡だといわれている。大正12年4月ごろ市ヶ谷加賀町2-1の、広くて門がある家に転居。昭和4年4月に納戸町40番地に転居し、1年半居住。この間新しく八十絃を使い、東京音楽学校の箏曲科の教師になる。昭和5年7月から死亡するまで26年間、現在の宮城道雄記念館である中町35番地に居住。



(2) 島村抱月

島村抱月（しまむら ほうげつ、1871年（明治4年）1月10日～1918年（大正7年）11月5日）は文芸評論家・演出家・劇作家・小説家・詩人。新劇運動の先駆けの一人として知られる。旧姓は佐々山、幼名は瀧太郎。1894年（明治27年）に東京専門学校（現・早稲田大学）を卒業。「早稲田文学」（第一次）誌の記者を経て、1898年（明治31年）に読売新聞社会部主任となる。その後母校の文学部講師となり、1902年（明治35年）から3年間、早稲田の海外留学生としてイギリスとドイツに留学。帰国後、早稲田大学文学部教授となり、「早稲田文学」誌を復刊（第二次）して主宰。自然主義文学運動の旗手の一人となる。



1906年（明治39年）には坪内逍遙とともに文芸協会を設立、1909年（明治42年）には協会附属の演劇研究所において本格的に新劇運動をはじめた。しかし1913年（大正2年）に妻子ある抱月と研究所看板女優の松井須磨子との恋愛沙汰が醜聞となったことで逍遙との関係が悪化、これで抱月は文芸協会を辞めることになり、須磨子は研究所を退所処分となった。

同年抱月は須磨子とともに劇団・芸術座を結成。翌1914年（大正3年）にトルストイの小説を基に抱月が脚色した『復活』の舞台が評判になり、各地で興行が行われた。須磨子が歌う劇中歌『カチューシャの唄』はレコードにも吹き込まれて大ヒット曲になり、新劇の大衆化に貢献した。しかしその成功も束の間、1918年（大正7年）、抱月はスペイン風邪で急死した。

(3) 松井須磨子

松井 須磨子（まつい すまこ、1886年（明治19年）3月8日～1919年（大正8年）1月5日）は、日本の新劇女優。本名、小林正子（こばやしまさこ）。1908年同郷の埴科坂城町出身の前沢誠助と結婚する。東京高師地歴科を卒業した前沢は、その年の11月に「東京俳優養成所」の講師になり、日本史を担当した。

1909年、坪内逍遙の文芸協会演劇研究所第1期生となる。家事がおろそかになることも多く、1910年10月、前沢と離婚。

1911年、『人形の家』の主人公ノラを演じて認められ、1913年、島村抱月と芸術座を旗揚げし、『復活』（トルストイ原作、抱月訳）のカチューシャ役が大当たりし、人気女優となった。須磨子が歌った主題歌『カチューシャの唄（復活唱歌）』（抱月作詞・中山晋平作曲）のレコ



ードも当時2万枚以上を売り上げる大ヒットとなった。このことから、須磨子は日本初の歌う女優となった。1918年11月5日、スペイン風邪で抱月が病死すると、2ヶ月後の1919年1月5日、芸術座の道具部屋において自殺（縊死）した。

(4) 水谷八重子

初代 水谷 八重子（しょだい みづたに やえこ、1905年8月1日 - 1979年10月1日）は、大正から昭和にかけての女優。新劇から新派に入り、戦後は新派の屋台骨を支える大黒柱として日本の演劇界に重きをなした。

時計商を営んでいた松野豊蔵と母とめの次女として牛込通り寺町35番地に生まれる。姉の勢舞は作家の水谷竹紫と結婚したが、五つのときに父が死去したため、八重子は母とともに姉と義兄のもとに身を寄せることになった。竹紫が劇団芸術座の設立に中心的な役割を果たしたこともあって、八重子もごく自然にもその舞台に立つようになった。大正12年10月、第二次芸術座が水谷竹紫・水谷八重子を中心に結成され、その演劇復興公演が牛込会館で行われた。震災後の最初の芝居ということで会館前から大久保通りまで長蛇の列が続き、入場できない客であふれていた。

(5) 竹久夢二



竹久 夢二（たけひさ ゆめじ、1884年（明治17年）9月16日～1934年（昭和9年）9月1日）は日本の画家・詩人。本名は竹久 茂次郎（たけひさ もじろう）。

数多くの美人画を残しており、その抒情的な作品は「夢二式美人」と呼ばれ、大正ロマンを代表する画家で、「大正の浮世絵師」などと呼ばれたこともある。また、児童雑誌や詩文の挿絵も描いた。文筆の分野でも、詩、歌謡、童話など創作しており、なかでも、詩『宵待草』には曲が付けられて大衆歌として受け、全国的な愛唱曲となった。また、多くの書籍の装幀、広告宣伝物、日用雑貨のほか、浴衣などのデザインも手がけており、日本

の近代グラフィック・デザインの草分けのひとりともいえる。

明治40年に結婚し、その新居の場所は、牛込区下宮比町4番地。津久戸小学校の前の旧厚生年金病院別館のあたりで、金さんという頭の住む仕舞屋風の二階を間借りする。

大正5年12月の水谷八重子の初舞台では夢二が描いた美人画を手ぬぐいに染めて初舞台の記念品として配っている。

(6) 三遊亭 圓生

6代目三遊亭 圓生（さんゆうてい えんしょう、1900年〈明治33年〉9月3日 - 1979年〈昭和54年〉9月3日）は、大阪市西区出身で東京の落語家、舞台俳優。本名、山崎 松尾（「崎」は右上が「大」ではなく「立」）。東京の新宿に長年住み、当時の地名から「柏木（の師匠）」とも呼ばれた。昭和の落語界を代表する名人の一人と称される。出囃子は『つくま祭』、のち『正札付』。大正9年に「牛込亭」にてはじめての独演会を開催。

(7) 柳家金語楼

初代柳家 金語楼（やなぎや きんごろう 1901年2月28日 - 1972年10月22日）は、喜劇俳優、落語家、落語作家・脚本家（筆名・有崎勉）、発明家、陶芸家。本名・山下敬太郎（やました けいたろう）。落語家時代の出囃子は『琉球節』。禿頭を売り物にし、エノケン・ロッパと並ぶ三大喜劇人として知られた。戦前は主に吉本興業（東京吉本）所属し戦後は自ら「金星プロ」を立ち上げた。旧字体は柳家金語樓。

神楽坂演舞場で第1回新作発表の独演会が行われ、神楽坂演舞場での高座に上がることが多くなると神楽坂に近い市谷砂土原町に転居、戦災による消失後は矢来町に居を構えた。



(8) 古今亭志ん朝

3代目 古今亭 志ん朝（ここんてい しんちょう、1938年3月10日 - 2001年10月1日）は、東京都文京区本駒込出身の落語家である。本名、美濃部 強次（みのべ きょうじ）。5代目古今亭志ん生の次男で、10代目金原亭馬生の弟、姪は女優池波志乃、義甥は俳優中尾彬。出囃子は『老松』。定紋は『鬼蔦』。

7代目立川談志、5代目三遊亭圓楽、5代目春風亭柳朝と共に、若手真打の頃から東京における『落語四天王』と呼ばれた。他に、同世代噺家の中では『東の志ん朝、西の枝雀』とも称される。

矢来町に自宅があり、ここから高座で掛かる呼び名は「矢来町」。



(9) 黒澤明

黒澤 明（くろさわ あきら、1910年3月23日 - 1998年9月6日）は、日本の映画監督、脚本家。黒澤明は入学した京華中学が関東大震災のため神楽坂の東京物理学校の校舎を借りて授業をしていたこと、兄が洋画封切館「牛込館」の専属弁士であり神楽坂に住んでいたことから、神楽坂に通うようになり、「牛込

館」「文明館」等の映画館にも通うようになった。神楽坂での生活を「寄席の芸人の芸を存分に味わうことができたのは、神楽坂に近い長屋生活の賜物だろう。それが将来の私にどれほど役に立つかなどとは夢にも考えずに、私はただ気楽に楽しんだ」と自伝で懐想している。

(10) 神楽坂はん子

昭和6年東京生まれ、本名、鈴木玉子。16歳から神楽坂で芸者をしていた。昭和26年古賀政男の座敷で「アリラン」を披露したことから古賀にいたく気に入られる。昭和27年「こんな私じゃなかったに」でデビュー。同年の、江利チエミの「テネシー・ワルツ」に対抗して作られた「ゲイシャ・ワルツ」が大ヒット。一躍スター歌手となる。



(11) 神楽坂浮子

昭和13年東京深川に生まれる。昭和28年、人気の神楽坂はん子のもものまねでラジオ出演したことから、古賀政男の門下生となり、高校を中退して神楽坂芸者となった異色の経歴の持ち主である。

3. 神楽坂と文化施設

(1) 矢来能楽堂

矢来能楽堂は、神楽坂通りと直行する牛込中央通りにほど近い新宿区矢来町に存する本格的な能舞台を備えた能楽堂である。

矢来能楽堂は矢来観世家が関東大震災で神田西小川町の舞台が消失後、牛込矢来町に観世九臈会能楽堂を落成し、第二次大戦末期の東京空襲によって前身の能楽堂が焼失した後、1952年(昭和27年)9月に再建した。社団法人観世九臈会の拠点として現在も伝統芸能の普及と維持に活用されている。

(2) 和良店亭(※現存せず)

菓店の坂、袋町3番地に江戸時代より「わら新」という色物寄席が都々逸などで賑わう。明治元年に「笑楽亭」に改称。明治22年に地元で古くから親しんでいる俗称「菓店」から「和良店亭」と改称した。夏目漱石が随筆「僕の昔」で「落語は好きで、よく牛込の和良店へ聞きにでかけたもんだ」と語っている。館主、洋行帰りの佐藤廉之助は明治40年に地下に洋食堂をつくり、1階が寄席という改築をしている。その後改装して「牛込高等演芸館」となった。ここには明治41年、新派の藤沢浅二郎が自費で創設した東京俳優養成所(のちに東京俳優学校に改称)が併設された。興行の空いている昼間に舞台では芝居の稽古等が行われた。

俳優養成所が閉校後、大正3年、再度改築され洋画専門の映画館「牛込館」に姿を変えた。

(3) 牛込亭(※現存せず)

神楽坂上より矢来町に向かってすぐ、通寺町の通り右側に木戸口があり、その路地奥に牛込亭があった。牛込亭は明治10年に寄席「岩田亭」で始まって、明治30年頃、相撲の武蔵川親方(元大関剣山)が買収して「三柳亭」とあらため、それをまた「牛込亭」と改称して、落語の定席と講談で昭和20年まで営業していた。

(4) 神楽坂演舞場(※現存せず)

色物席「辻むら」として神楽坂3丁目5番地に建設。つぎに改称して浪曲席「若松亭」となる。さらに明治41年に「神市場亭」に改称。神楽坂3丁目6番地に移転。大正の中頃「神楽坂演芸場」と改称し、さらに昭和10年頃「神楽坂演舞場」と改称。2階建ての150席のきれいな会場であった。柳家金語楼の独演会、吉本興業と提携した名人会形式の興行をおこなっていたが、震災により消失。

(5) 芸術倶楽部（※現存せず）

大正4年9月、横寺町410番地に洋風2階建て、観客席300名の小劇場として完成。この建物は大正博覧会の演芸館を移築したものである。総工費七千円。建築費の大口寄附者（五百円）に田川大吉郎、足立欽一、田中間四郎左衛門の名があり、残りは巡業からの収入を充てる。抱月はこの芸術倶楽部で俳優の再教育（養成主任は田中介二）を行い、将来、俳優学校を、さらに演劇大学のようなものに発展させたいという遠大な夢を抱いていた。

抱月、須磨子の死後、跡地は芸術倶楽部アパートとなり、戦災による消失まで作家、画家、演劇人たちの住まいとなっていた。

(6) 牛込会館（※現存せず）

関東大震災の少し前に竣工し、震災で消失しなかった数少ない劇場であり、第二次芸術座の復興公演の舞台となった。現在の神楽坂3丁目、仲通り商店街の入り口にあるロイヤルホストのある場所にあった。

(7) 文明館（神楽坂ムサシノ館）（※現存せず）

明治40年頃、神楽坂6丁目の成金横丁を入った左側に初めての映画館「文明館」が開館。その後、現スーパーよしやのある場所に移設。時代劇の上映が主であった。その後、「神楽坂日活館」となり戦災により焼失後、「神楽坂ムサシノ館」として再建された。映画産業の斜陽化により昭和53年頃、スーパーとなった。

(8) ギンレイホール

昭和49年開館。それまでの銀鈴座から名画座ギンレイホールとしてスタート。平成8年、現在の加藤忠館主が事業を引き継ぎ、改装工事を終えると、翌9年ギンレイシネマクラブという会員制度を発足し、年会費1万円で何本でも観ただけ観ることができるという、日本初のシネマパスポートを導入した。同じ建物の地下には成人映画専門館の飯田橋くらら劇場がある。

戦後の映画隆盛期には、牛込文化劇場、神楽坂メトロ劇場、佳作座等の映画館が存在したが、現在ではギンレイホール、飯田橋くらら劇場のみが残されている。

(9) カフェ・プランタン（※現存せず）

カフェ・プランタンは関東大震災で銀座店が損壊したため、翌年被害の少ない神楽坂の通寺町に神楽坂店を開店した。店主が画家の松山省三、妻の松井潤子も女優であり多くの文化人が来店していた。

開店後、間もなく市川猿之助と平岡権八郎が上海で買った麻雀牌を持ち込みゲームを始め、菊池寛、古川緑波などが参加することになり、日本の麻雀の歴史は神楽坂プランタンから始まった。日本麻雀連盟の初代総裁は菊池寛である。

4. 神楽坂を舞台とした作品

(1) 文学作品

- 夏目漱石 「坊っちゃん」：毘沙門天の縁日で魚を釣り落とした話
「それから」：主人公代助が神楽坂の途中で地震に遭う
「硝子戸の中」：神楽坂界限の様子を描く
- 田山花袋 「東京の三十年」：牛込一体の様子を描く
「生」：主たる場面は牛込で、神楽坂の賑わいについて触れている
「蒲団」：主人公時雄は矢来町に住み、縁日や夜毎神楽坂に出歩く人々が描かれる
- 小栗風葉 「恋慕ながし」縁日や花街の賑わい、門付の夫婦が神楽坂界限を巡る話が描かれる
- 正宗白鳥 「毒」：縁日の見せ物の様子を描く
「神楽坂の今昔」：下宿仲間の芸者遊び、早稲田文学と寄席のことを懐述
- 泉鏡花 「龍胆と撫子」：明治から大正の神楽坂の様子の変化を描く
「神楽坂の唄」：所帯をもって忘れることができない神楽坂を唄にした
- 北原白秋 「物理学校」：物理学校（東京理科大）の目の前にあった住まい環境の中から生まれた詩
- 加能作次郎 「早稲田・神楽坂（大東京繁昌記）」：明治から大正初期の縁日の賑わい、神楽坂界限を細かく記述
- 永井荷風 「夏すがた」：艶やかな神楽坂の大正時代を彷彿させる短編
- 水野仙子 「神楽坂の半襟」：神楽坂を散歩しているうちに起こる、男と女の感情のすれ違いを主題とした作品
- 矢田津世子 「神楽坂」：神楽坂を舞台に庶民の流転する日常を象徴的に描く
- 徳田秋声 「和解」：横寺町を舞台に泉斜汀の急死を機会に、その兄、泉鏡花との不和の解消を題材にした小説
- 有島武郎 「骨」：自殺する二ヶ月前に神楽坂を舞台に書かれた小説
- 広津和郎 「年月のあしおと」：自伝的文壇史で生家矢来町の子供時代の生活を記述
- 佐多稲子 「私の東京地図」：神楽坂を舞台にした一遍「坂」と焦土と化した神楽坂を記述
- 金子光晴 「詩人」：神楽坂での野宿や放浪生活、自己の精神形成の場だったことを記述

(2) 映像作品

・映画作品

「毘沙門天慕情」(土居通芳監督・砂塚秀夫主演)

花柳界の伝統を現代に伝えて粋な笑いふりまく”たいこもち”の2代目を主人公に泣き笑いを描く。

「BU・SU」(市川準監督・富田靖子主演)

神楽坂の置屋を営む叔母に預けられた麦子が芸者見習いをしながらの高校生活を描く青春映画。

・ドラマ作品

「明日がござる」(平岩弓枝脚本、水前寺清子主演)

神楽坂の串料理屋と隣り近所の交流を描く人情ホームドラマ

「心」(橋田壽賀子脚本、宇津井健主演)

神楽坂のとんかつ屋を舞台に四人姉弟と二人姉妹を中心に兄弟愛をテーマに描いたホームドラマ。

「気まぐれ本格派」(石立鉄男主演)

神楽坂にある貸衣装店を継ぐことになった主人公を中心にしたホームドラマ。老舗店舗、商店街や赤城神社などで多くの撮影が行われた。

「なさけ坂旅館」(林隆三主演)

神楽坂にある小さな旅館を舞台に、女三代の女系家族と紛れ込んだ青年が織りなすホームコメディ。

「拝啓、父上様」(倉本聰脚本・二宮和也主演)

神楽坂の老舗料亭を舞台に関わる人々や出来事を描いた人情ドラマ。商店街、路地、社寺、店舗など神楽坂で全編を通して撮影された。神楽坂で問題となっていたマンション建設問題も内容に盛り込み、当時の神楽坂が色濃く投影されている。このドラマ放送の後、毘沙門天が「嵐の聖地」として賑わいをみせている。

「神楽坂署生活安全課」(館ひろし主演)

神楽坂署生活安全課の幼なじみコンビの刑事によるミステリードラマ。シリーズ化され5作品が制作された。

(3) 漫画作品

「僕とシッポと神楽坂」(たらさわみち)

神楽坂の古い動物病院を引き継いだ若いイケメンの先生の神楽坂での交流を描く。

< 神楽坂と文化関連 地図 >



【4】 神楽坂と建築

1. 神楽坂に現存する名建築

(1) 矢来能楽堂（国登録有形文化財）

矢来能楽堂は、神楽坂通りと直行する牛込中央通りにほど近い新宿区矢来町に存する本格的な能舞台を備えた能楽堂である。第二次大戦末期の東京空襲によって前身の能楽堂が焼失した後、1952年（昭和27年）9月に再建したもので、社団法人観世九阜会の拠点として現在も伝統芸能の普及と維持に活用されている。

建物は、木造モルタル平屋（一部地下1階）で、切妻の瓦屋根を持ち、舞台を含む客席（能楽堂では「見所」と呼ぶ）は、幅52尺（約15.8m）、奥行き39尺（約11.8m）という大規模なもので、約7.4mの高さを持つ天井は、3尺ピッチの格天井である。



(2) 宮城道雄記念館「検校の間」（国登録有形文化財）

新宿区中町は宮城が居住した地であり、木造平屋、二間からなる「検校の間」は、1948年12月に竣工した宮城の書斎である。1945年の空襲で中町の家を失った宮城は、葉山の別荘から都内に通うも視覚障害ゆえに移動の苦勞に堪え難く、1948年、ふたたびこの地に住まいを再建する。

建築制限のために三世帯の名義で細長いコの字型の住居を建てたが、半年後そのはずれに突き出すように増築したのが「検校の間」だった。だが稽古場との近接ゆえ騒音に悩んだ宮城は、1950年に建物の角度を90度振って曳き家する。更に1955年になると自前の録音室を建てるために再び曳き家を行い、角度を元に戻しつつ現在の位置に固定した。



(3) 高橋建築事務所 (IF アユミギャラリー) (国登録有形文化財)

旧高橋建築事務所 (IF アユミギャラリー) は、戦後に復興された神楽坂の町並みを代表する建築物のひとつで、昭和28年11月に上棟し、翌年の昭和29年に竣工したものである。当初は直屋 (単純な矩形の建物) として計画した、と設計にあたった建築家高橋博 (1902~1991) は語っていたが、竣工後 (あるいは工事途中)、間髪を入れずにL型に増築していて、この部分の屋根は四寸勾配の瓦屋根になっている。主要部と増築部との意匠や素材、取り合いや仕上げにいたるまで違和感がほとんどないこと、さらに高橋家の聞き取りを照合すると、増築部も含めて同年の完成と見てよい。



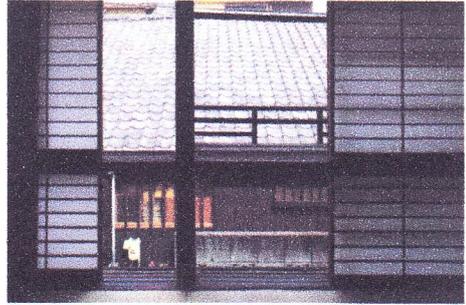
(4) 鈴木家住宅 (横寺の家) (国登録有形文化財)

横寺の家は新宿区横寺町に、高橋家住宅として昭和21年12月に上棟し、翌22年に竣工したものである。設計にあたったのは、旧高橋建築事務所 (アユミギャラリー) を設計した建築家高橋博 (1902~1991) で、この住宅は建築家の自宅兼アトリエとして作られたものだった。アユミギャラリーの創建が昭和29年だが、この建物はその7年前に建てられたということになる。



(5) 一水寮 (国登録有形文化財)

高橋建築事務所の大工寮として昭和26年頃に建てられたものである。年代を決定づける上棟の棟札等は見つかっていないが、この地で生まれ育った高橋家の家人の証言や古い図面や写真等が現存しているのでそれを裏づけることができる。戦後の神楽坂の生活史の一端を今に伝える貴重な遺構であるとともに、細い屈曲した路地に木造家屋が並ぶ、典型的な神楽坂の町並みを構成する建築物のひとつということができる。



(6) 旧常盤家本館（国登録有形文化財）

都心に残る花柳界の地、神楽坂を代表する豪奢な和風建築である常盤家は、待合（まちあい）として1950年（昭和25年）に竣工した、木造2階建ての建物である。

当初は北棟と東棟のみであったが、その後、1954年（昭和29年）に南西側の広間部分を増築、3つの矩形の建物を廊下で繋ぐ現状の形となる。敷地は、神楽坂通りと直交する本多横丁に面し、界限では最も賑わいのあるエリアに存する。前面道路から13mほどセットバックして建物は建つが、その玄関廻りのファサードは、鏝のついた唐破風屋根、銅板の庇や樋、宮大工の作といわれる擬宝珠付き欄干、欄間のステンドグラスなど、上質かつ風格のある造りとなっている。



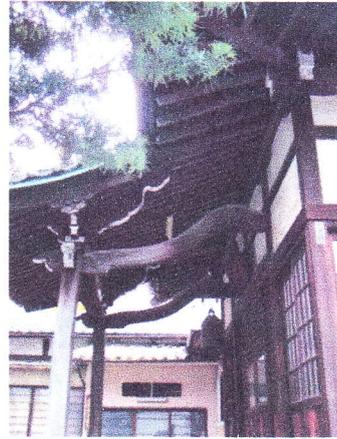
(7) 新井家住宅（国登録有形文化財）

第二次大戦末期の空襲を免れた北山伏町には戦前に建てられた住宅群が残っているが、その中でも敷地の規模、擬洋風建築の様式、建物の設えの上質さにおいて傑出した洋館付き住宅がこの新井家住宅である。敷地および建物は、1927（昭和12）年に現当主の祖父が「葉山石油」から購入したものである。その時の建物形状は現状とほぼ同じであり、それ以前すなわち昭和初期の建築であることは確実である。



(8) 蓮秀寺本堂

新宿区薬王寺町に建つ蓮秀寺本堂は、神楽坂5丁目の善國寺の毘沙門堂として戦後まもない1950(昭和25)年4月に竣工・落慶した建物であり、善國寺本堂のコンクリート造での再建に際して、いったん解体し蓮秀寺境内に移築されたものである。



(9) 旅館 和可菜

かつて都内を代表する花柳界のひとつだった神楽坂界限は、都心にありながら石畳の路地や木造の料亭建築などが残るエリアであり、ドラマの舞台になるなど近年注目を集めている。旅館和可菜が建つ通称「兵庫横丁」は、びんころ石の狭い路地と黒板塀が並ぶ「最も神楽坂の風情を残すスポット」として知られ、雑誌やテレビなどでたびたび紹介されてきた代表的な景観のひとつである。旅館和可菜は、1954年創業の木造2階建ての和風旅館であり、霧除けを帯びた入母屋造りの瓦屋根に下見板張りの外観は、玄関脇の植栽とともに閑静な路地に彩りを添えている。

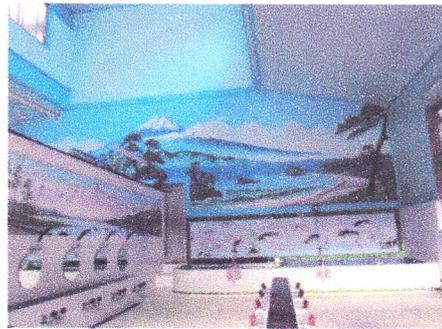
いわゆる「ホン書き旅館」として知られ、内田吐夢・深作欣二・早坂暁・野坂昭如・市川森一・金城哲夫・中上健次・竹山洋・内館牧子・伊集院静・山田洋次・石堂淑朗など、日本を代表する映画監督・脚本家・作家たちが仕事場や打ち合わせの場所として利用し、数々の名作を生み出した場であり、日本の文学・映画文化とも浅からぬ縁がある。また、村松友視『夢の始末書』や鈴木尚之『私説内田吐夢伝』、野坂昭如「オフサイド76」、色川武大「私の日本三景」などの作品に和可菜は登場している。旅館和可菜は、神楽坂の町並みを代表する建築物のひとつであるとともに神楽坂の文化的エピソードに彩りを与える貴重な建物であるといえよう。



(10) 熱海湯

神楽坂通りを南側に折れ、「熱海湯階段」と呼ばれる石段を下ると、狭い路地に面して熱海湯が建っている。都内の銭湯の多くが廃業し、或いはビル内施設に姿を変える中、熱海湯はいまなお木造の銭湯として現役で営業を続けている。

熱海湯周辺は石段や路地が連続し、ドラマのロケ地にも選ばれるなど、特に「神楽坂らしさ」が色濃く残る一角である。また、文豪の足跡を巡る観光ルートとしても欠かせないエリアである。坂（階段）の名称になっていることからわかるように、地域のランドマークとして親しまれた住民の交流の場としての側面も有している。熱海湯は、花柳界としての神楽坂の隆盛を今に伝える大規模な木造建築であり、同一用途で使用されている貴重な施設である。



< 神楽坂と建築関連 地図 >



【5】 神楽坂の歳時記

1月 <初詣>

毘沙門天をはじめ、神楽坂には多くの寺社があり、多くの参拝者が初詣に訪れる。特に、毘沙門天を含む新宿地区の7つの寺社をめぐる「山の手七福神」は人気がある。

2月 <節分>

2月3日頃の立春前日には、毘沙門天、筑土八幡神社、赤城神社、神楽坂若宮八幡神社などで節分の行事が行われる。毘沙門天では豆撒きの前に太神楽の奉納もある。

3月下旬～4月上旬 <花見>

神楽坂周辺は桜の名所の宝庫。都内有数のお花見スポットである靖国神社や千鳥ヶ淵は徒歩圏内であり、飯田橋駅前の外堀も花の名所。

7月 <神楽坂まつり>

神楽坂通り商店会主催の夏まつり。『ゆかたでおいでよ神楽坂』をテーマに、「ほおずき市」と「阿波踊り」の2部構成（2日ずつ）で開催。

ほおずき市は、毘沙門天を中心にほおずき直売所や周辺飲食店の屋台が出店され、演奏会、金魚すくいなどの夜店もあり、たいへん賑わう。東京の夜店は、寅の日にこの門前にたった縁日が始まりと言われている。期間中には毘沙門天での「ほうろく灸」やNPO 粋なまちづくり倶楽部による「ゆかたでコンシェルジェ」も行われる。

阿波踊りは2日間に渡り、地元の「かぐら連」を中心に、周辺企業、高円寺の連など約30連が踊りを披露する。

9月 <例大祭>

地元の赤城神社、筑土八幡、若宮八幡の例大祭が行われ、宮神輿や町内神輿が神楽坂を巡行する。

10月 <お会式>

日蓮宗の寺である毘沙門天善國寺で、10月14日に日蓮聖人の命日（13日）に行われるお会式が行われる。法要に続き行われる万灯行列は太鼓の音に合わせ、神楽坂下より毘沙門天を目指す。

10月下旬～11月上旬 <まち飛びフェスタ>

「まちに飛び出した美術館」として1999年にスタートした、神楽坂の手作り市民文化祭。坂と路地のヒューマンスケールな空間を舞台に、伝統芸能から現代アートまで幅広い分野でのイベントや催事が、10月下旬から11月はじめに渡り開催される。

<参考資料>

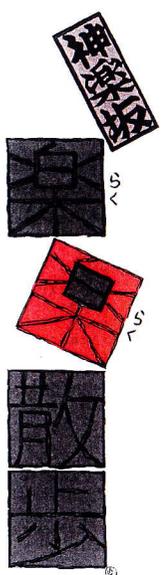
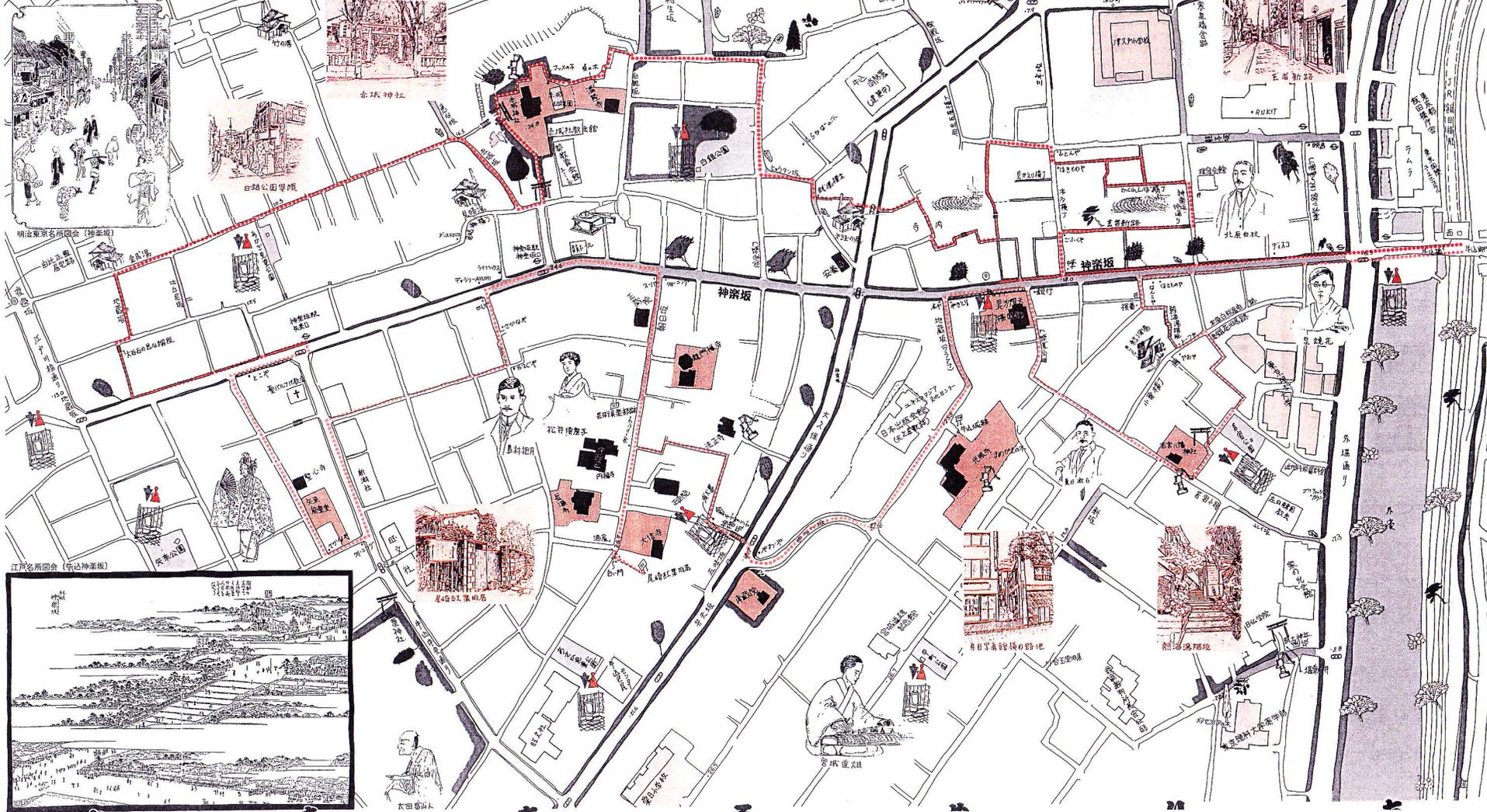
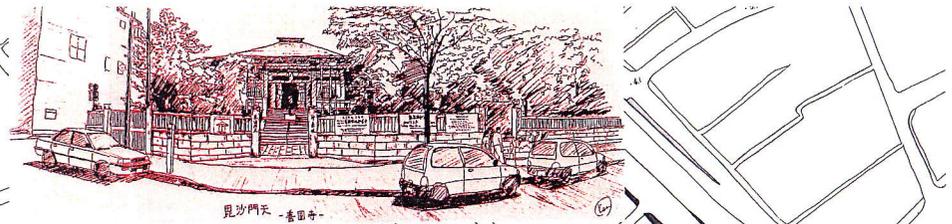
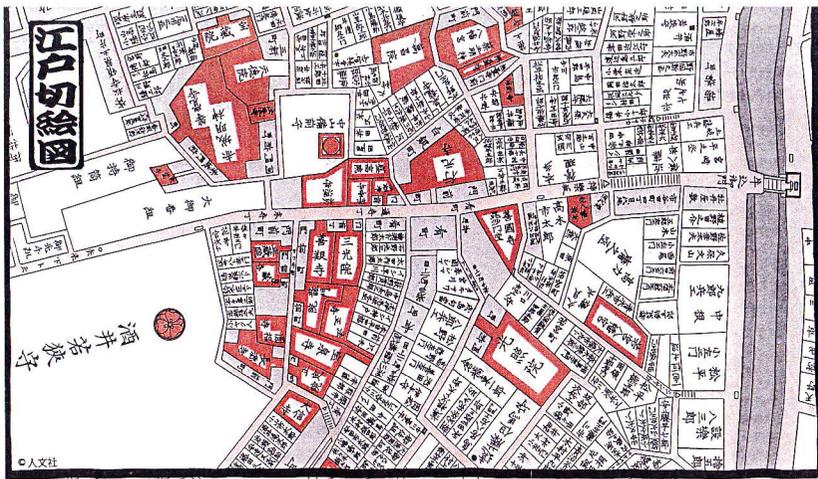
- 「粋なまち神楽坂の遺伝子」 NPO 法人 粋なまちづくり倶楽部
「神楽坂がまるごとわかる本」 渡辺功一
「神楽坂と文学」 飯野二郎
「つくどがみてきた、まちのふうけい」 津久戸小学校
「神楽坂 キーワード集」(第一集・第二集) NPO 法人 粋なまちづくり倶楽部
「まちの思い出をたどって」(第一集～第六集) NPO 法人 粋なまちづくり倶楽部
「てくてく牛込神楽坂」 web
「ウィキペディア」 web
「テレビドラマデータベース」 web
「産経ニュース」 web

「神楽坂を良く知る教科書 二神楽坂検定(初級)二」

2015年11月14日 第1刷 発行

発行 特定非営利活動法人 粋なまちづくり倶楽部
「神楽坂検定」 実行委員会

無断転載を禁じます



路地・坂・石畳

■ 神楽坂地区まちづくりニュース・特別号

〈この地図の使い方〉

この「神楽坂・商業散歩」は、神楽坂地区（神楽坂1～6丁目）とその周辺で、歴史的な社寺・情熱的な坂・趣のある横丁などを巡ります。この地図を片手に、まちの魅力の再認識や新たな発見をしてください。

この地図では、2つの散策コースを設けました。「石畳・科学コース」は、神楽坂通りの北面を歩くコース。石畳の路地や横丁などを巡ります。「歴史・文化コース」は、神楽坂通りの南面を歩くコース。歴史的な寺社などを巡ります。2つのコースとも、JR飯田橋駅と地下鉄東西線神楽坂駅を結んでいます。どちらの駅から歩き始めてもかまいません。ゆっくり歩いて1時間で歩けるコースです。神楽坂の魅力を感じながら散策してみてください。コース以外の横丁を歩いてみると、また違った魅力が隠れているかもしれません……。

- 【凡例】
- 石畳・科学コース
 - 歴史・文化コース
 - 坂道
 - 石畳の道
 - ⬇ 地下鉄出入口
 - ⬆ 地下鉄出入口（予定）
 - ⬆ 神社
 - ⬆ 公園
 - ⬆ 学校
 - 8.3 標高

神楽坂・商業散歩 一路地・坂・石畳 - 平成6年3月
 編集：神楽坂地区まちづくりの会
 編集協力：東京理科大学建築学科沖塚研究室
 企画：東京都総合計画研究所
 発行：新宿区都市整備部管理課
 〒160 新宿区歌舞伎町1-4-1
 TEL 03-3209-1111 (内線4412)

